

虫探し

刈谷市立住吉幼稚園（愛知県刈谷市）

【4歳児】

4歳児は「見る・やってみよう・どうしてかな・やったあ」をキーワードにして実践をしている。昨年の実践から、保育者や友達と一緒に「みる・やってみよう・どうしてかな・やったあ」という体験を通して、なぜ？ どうして？と考えたり、命の大切さに気付いたりする。また、失敗の中から新たな気付きに出会ったり、幼児の考えや発見に共感したりすることで次の挑戦へとつながる。ということを通理解した。

3歳児の時に経験したことを通しての今年度の実践

<昨年の3歳児 「みる・やってみよう」～ダンゴ虫探しを通して～ で学んだこと>

1. A児の姿

・他児が保育者と一緒にダンゴ虫探しを楽しむ中、虫嫌いなA児は他児の様子は気にするが自分からはダンゴ虫にかかわれない。

2. 保育者の願い

・保育者と一緒にダンゴ虫を見たり触ったりして自分からかかわって遊ぶことを楽しんで欲しい

3. 昨年の実践のまとめ

- ・保育者がモデルになる
- ・幼児の思いに共感する みる・やってみよう

保育者が楽しそうにかかわり幼児のモデルになったり、幼児の驚きや発見に共感しながら一緒に探したりすることが、より興味・関心をもち「みる・やってみよう」につながる。

4. 今年度4歳児へのねらい

- ・虫を探したり、世話をしたりする中で、自分なりに「～かな」「～してみよう」と考えたり行動したりする。
- ・自分なりに考えたこと感じたことを保育者や友達に伝えたり、友達の思いに耳を傾けたりする。

A児の実践

事例1「やっぱり葉っぱが好きなんだ」

4月下旬

進級して、3歳の時から引き続き2～3人の友達とダンゴ虫探しを楽しんでいる。

去年の経験があるため植木鉢の下や葉っぱの下をガサガサと探し、持っているカップに入れている。たくさんダンゴ虫が入っているカップを嬉しそうに保育者に見せにくる。「こんなにたくさん見つけてすごいね。ちょっとおうちが狭そうだね」と保育者が声を掛けると、少し考えたA児は「虫かごに入れてあげよう！先生、虫かごちょうだい！」と要求する。捕まえたダンゴ虫を入れたA児・B児は「葉っぱとか土とか長い棒とか好きだから入れてあげよう」と去年保育者がやっていたことを思い出してダンゴ虫の家作りを始めた。飼育ケースを覗いては「やっぱり葉っぱが好きなんだよね。かくれんぼしてるもん！」「本当だ！遊んでる」とダンゴ虫を大切にしていた。

<考察>

・昨年ダンゴ虫探しの中で保育者が一緒に探したりモデルとなったりしたことで、4歳になってからも、その保育者の姿を思い出しながら家作りをするなど、自分たちの経験を活かしながら友達と一緒に探ることができたのだと思う。



事例2「カミキリムシって何食べる？」

7月上旬

A児がカミキリムシを持ってきた。飼育ケースに入れたカミキリムシはプラスチックが滑るのかすぐにひっくり返ってしまう。

「すぐにひっくり返っちゃうね」と保育者がつぶやくとA児は「起き上がれないみたい。かわいそう」とつぶやく。B児は「なんか滑ってるみたいだね」と笑う。B児の言葉に何かひらめいたA児は「いいこと考えた。棒を持ってきて休憩できるようにしてあげよう」と一言。「いい考えだね。カミキリムシはよく木の枝にいるもんね」と認めると嬉しそうにB児と棒を見つけに行く。

何本も入れた棒の上に登るカミキリムシを見ると「もうひっくり返らんよね」と二人で顔を見せ合っている。それを見ていたC児が「餌は入れんの？」と入ってくる。B児は「いつも木の所にいるからカプトムシみたいにゼリー食べるんじゃない？」と言う。「先生ゼリーある？」と言うのでカプトムシ用のゼリーを持ってきてケースに入れた。C児は「そうだ！お兄ちゃんがカミキリムシは紙をかじるって言ってた」と製作コーナーから持ってきた紙をちぎり中に入れる。「これでいいね」と完成したカミキリムシの家を満足そうに眺めている。

<翌日>カミキリムシが死んでいた。「何で死んだ？」「かわいそう」と話しながらA児とB児はケースを覗き

込んでいる。

「かわいそうだね。紙もゼリーも入れてあげたのにね」と保育者も二人の思いに寄り添った。A児は「かわいそうだからお墓に埋めてあげよう」と言うので一緒にお墓を作ることにした。空になった飼育ケースをさみしそうにのぞく二人。保育者も一緒にケースを覗きながら「何で死んじゃったのかなあ」とつぶやくと「あれ？ゼリーが全然減ってない」とA児。「ゼリーは食べないのかな」「だから食べるものが無くて死んだんだ」と二人で話をしている。

<二日後>遊んでいたA児とB児は「カミキリムシ捕まえたあ」と嬉しそうに保育室に帰ってくる。

保育者が「ほんとだ！どこにいたの？幼稚園にもいるんだね」と一緒に喜ぶと「お化けの森のみかんの木にいたよ」「届かんとこにもまだいたよね」と興奮する二人。保育者が「みかんの木が好きなのかなあ」と言うとB児が「みかんの木にたくさんいるってことはみかんの木が餌なんじゃない？」と気付く。A児も「きっとそうだ！だからみかんの木にいるんだ」とみかんの木の葉っぱを取りに行った。

飼育ケースに入れてあげると、しばらくしてみかんの木の葉っぱの上にカミキリムシが乗っていた。B児は「やっぱりね。みかんの木の葉っぱが餌だったね」と二人で顔を見合わせて喜んでいる。実際には樹液を吸うらしいが、幼児は葉っぱに乗っていることで、いつもカミキリムシがいるみかんの木の葉っぱが餌だと信じて満足そうにしていた。

<考察>

- ・今までのいろいろな虫の飼育で経験したことを思い出したり、その虫がいる場所や自分が知っている情報を友達と交換しながらどうしたらいいのか考えたりしている姿が見られた。保育者が幼児の思いに添って共感していくことでより幼児は考えを出し合い、自分たちで考え、やってみる姿につながったと思う。
- ・カミキリムシの死という経験から「どうして？」「次はこうしよう」「やっぱりそうだね」と考え行動する姿につながったと思う。幼児が「カミキリムシはみかんの葉っぱを食べる」と考えたことは正しいところにたどり着いてはいないが、見守ったことで自分たちなりに行動することができた。幼児が考えたり行動したりする姿に、共感したり受け入れたりし、保育者も一緒に考えていくことで、幼児が自分たちなりに考え・行動する力がさらに大きくなると思う。その繰り返しが次への意欲につながっていくと考える。

みどころ

3歳の時の姿、4歳当初の姿とその3ヵ月後の姿から、A児の変容を読み取ることができ、保育者が子どもの実態を理解し、願いをもって保育することの大切さが分かります。また、カミキリムシとのかかわりや心の動き、友達とのかかわりから、4歳児なりに体験していることを次の経験に活かし、かかわり方が変容していることが分かります。子どもに寄り添い理解しながら変容をとらえると共に、まだ不十分な面も把握し、指導のあり方を探る保育者の姿勢が伝わってきます。